

『中辺分別論』第4章の研究

—三十七菩提分法を中心に—

北 山 祐 誓

目次

- 0. はじめに
- 1. 『中辺分別論』について
 - 1.1 第4章「対治修習品」について
 - 1.1.1 対治修習の分位
 - 1.1.2 果の獲得
 - 2. 三十七菩提分法について
 - 2.1 三十七菩提分法解釈に関するアビダルマと瑜伽行派の相違
 - 2.2 瑜伽行派における三十七菩提分法の大乗的解釈
 - 2.2.1 『菩薩地』における三十七菩提分法修習方法
 - 2.2.2 『中辺分別論』における三十七菩提分法修習方法
 - 2.2.3 『大乘莊嚴經論』における三十七菩提分法修習方法
- 結

0. はじめに

インド初期瑜伽行派に属する文献である『中辺分別論』(*Madhyāntavibhāga*: MAV) 第4章「対治修習品」(Pratipakṣabhāvanā-pariccheda)では、第1章に先立つ「論の綱要」(*Śāstraśarira*)によって示されたように、「対治修習」、「対治修習の分位」、「果の獲得」という修習に関する三項目が、全18偈をもって説かれている。他方、MAV第1章「相品」においては、「虚妄分別」と「空性」という二つの重要思想を基盤として、虚妄分別と二取との密接な関係の上に成り立つ、MAVの特徴的な三性説が明らかにされた。この第1章「相品」で説かれた瑜伽行派の哲学的理論的側面を受けて、第4章では、実践的側面にあたる瑜伽行派の伝統的修道論が展開されていく。これまで、諸研究者によってMAVに関する研究が為されてきたが、この第4章に特化した研究はほとんどない。

したがって、本研究では、MAV 第 4 章「対治修習品」及び安慧 (Sthiramati, ca. 510-570) による注釈、すなわち『中辺分別論釈疏』(*Madhyāntavibhāgaṭīkā*: MAVṬ) の精読を通して、山口 [1934] (以下 Y) のテキスト再校訂を試みると同時に、同章に説かれる三十七菩提分法を初めとする瑜伽行派の修道論体系について検討する。

1. 『中辺分別論』について

MAV は、弥勒 (Maitreya, ca. 350-430) の五部に数えられ、弥勒によって説かれた思想を無著 (Asaṅga, ca. 395-470) が語り手として伝えた本偈に、世親 (Vasubandhu, ca. 400-480) が注釈を施したとされている。また、安慧による復注もサンスクリット原典及びチベット訳で伝わっている。

本論の題名に関しては、弥勒本偈では「中を弁別する論 (*madhyavibhāgasya śāstraṃ*)」であるといい、それを世親は「中と辺とを弁別する〔論〕 (*madhyāntavibhāgam*)」と注釈している^①。全体の構成は大きく分けて、七つの主題によって構成されている。サンスクリット原典及びチベット訳では、(1)相品 (2)障品 (3)真実品 (4)対治修習品 (5)無上乘品の全 5 章からなるが、一方玄奘訳では、その第 4 章をさらに「対治修習品」、「修住品」、「得果品」の三つに分け、全 7 章 (品) からなるとしている。この章構成について、山口 [1935] では、サンスクリット原典及びチベット訳に準じた「七義五品」と、玄奘訳に準じて第 4 章を(4)対治修習(5)対治修習の分位(6)果の獲得の三つに区分し、七義をそのまま全 7 章に対応させた、「七義七品」という二種の構成のあり方を示唆している^②。さらに、真谛訳に見られる七義五品を意識した七義七品にも言及している。同氏の研究以来、MAV の文献研究は長尾氏による MAVBh の校訂を初めとして著しく進展したが、この章構成に関する検討はこれまでほとんど為されてこなかった。この問題について、以下に検討を試みる。

まず、サンスクリット原典では、MAVBh の Na、Ta、MAVṬ の Y、Pa いずれも、(1)対治修習の内容の下に(2)分位と(3)果の獲得が論じられるものとし、三義を一つにまとめている。そして、(3)果の獲得の最後に総義 (*piṇḍārtha*) を置き、七義五品の構成としている。チベット訳でも、世親釈・安慧釈ともにサンスクリット本の構成に従い、七義五品の構成としている。しかし、漢訳には相違が見られ、玄奘訳では、第 4 章に当たる三義を一つ一つ独立したものと捉え、七義をそのまま七品とする構成を示している。一方、真谛訳では、章の構成としては玄奘訳と同様に七義七品をとり、第四対治修住品、第五修住品、第六得果品としているが、梵蔵のように三義に対する総義を第六得果品の後に説いている。さらに、その総義の終わりに「第四に三品がある」^③と示し、三義 (品) をまとめて第四品とする痕跡も残している。

このように、全体の章構成を検討する上で、現存の文献から考えられ得る構成方法として、

梵藏に準ずる七義五品型、真諦訳に見られる五品七品混成型、玄奘訳に準じた七義七品型の三種がある。どの類型が妥当であるかを検討するにあたっては、七義中の(4)対治修習(5)対治修習の分位(6)果の獲得の三義各々の相関・因果関係に注目すべきである。

また、MAVT「論の綱要」の安慧訳では各義を説明する文脈の中で以下のように説かれている。

所対治を滅するために〔対立物を治すものが〕対治であり、それは道である。それを習行することが「修習」である。「分位」とは、まさにそれ（修習）が連続して生じる段階（viśeṣa）のことである。また、それ（分位）は種姓位を初めとして十九種ある。「得果」とは、果を得ることである。それは異熟果を初めとして十五種ある。「無上乘」とは、「これによって行く」ということから乗である。また乗であって無上なるものであるから、無上乘である。またそれは行無上を初めとして三種ある。^④

この安慧の注釈部分を見る限り、七義七品の可能性を消し去るのは議論の余地があるのではないかと考えられる。しかし、ここではサンスクリット原典、Y本、チベット訳及び安慧訳に従って、全5章として論を進めたい。

1.1 第4章「対治修習品」について

第4章「対治修習品」の内容・位置付けに関して、MAVT「論の綱要」では各義品の順序を説明する箇所、以下のように述べられている。

次に、その〔第3「真実」という〕所縁によってその〔第2「障」〕を加行をもって滅滅する。それ（加行）が〔第4〕「対治修習」であると知られるべきである。その後、「対治修習」には、所対治の断滅と対治の増大によって種姓位などの分位があることが知られるべきである。その後、出世間法が現前するのは諸々の果〔の獲得〕であり、〔それらは〕預流果などであると知られるべきである。また、これら一切は有上であるから、菩薩たちにとって声聞などと共通である。^⑤経に「その出家者（菩薩）は、声聞の修学、法儀、行境、現行を学ぶ。また独覚の修学、法儀、行境、現行を学ぶ。また、菩薩の修学、法儀、行境、現行を学ぶ」と説かれているように。そして、諸々の菩薩にとって無上〔義〕は〔二乗と〕共通でなく、第七義は無上〔義〕である。^⑥

ここで述べられているように、第4章「対治修習品」における、(1)対治修習、(2)対治修習の

分位、(3)果の獲得は、有上であり、声聞などの二乗と共通して菩薩も修することが明示され、二乗が修することのない菩薩独自の行は第5章「無上乘品」において説かれる、とされている。さらに続いて「[障を]断滅する方便を示すために、その後に随行を有する対治があり、[それは]道である^⑦」と述べられる。すなわち「対治修習品」と「障品」との関係について、「障品」の内容を所対治とする、能対治としての「道」すなわち三十七菩提分法が「対治修習品」の主題とされているのである。

また、MAVBh 第4章の冒頭においても、章の名称となっている「対治修習」とは「三十七菩提分法の修習」であり、修習すべき対治とは三十七菩提分のことであると示される。続く、第1偈より四念処を初めとする三十七菩提分法の各々の解説が為されていく。

次項では、(1)対治修習以外の、(2)対治修習の分位及び(3)果の獲得について、内容を概観しておく。

1.1.1 対治修習の分位

「対治修習」の次に、「それ(対治修習)における分位」(tatrāvasthā)が説かれる。世親釈では、その「対治修習の分位」は全十八種あり、その内訳を示すと以下の表の通りである。^⑧

十八分位	世親釈	分位の要約の分類 ^⑧
(1) 因位	仏陀の種姓に属する者	①能力を具えた位 (③不浄位)
(2) 入位	菩提へ発心した者	②行が起こされる位 (③ ")
(3) 加行位	行果の得られていない者	② " (③ ")
(4) 果位	行果が得られた者	④不浄かつ清浄の位
(5) 有所作位	有学の者	④ "
(6) 無所作位	無学の者	⑤清浄の位
(7) 殊勝位	神通などの徳を具えた者	⑥莊嚴を具えた位
(8) 有上位	菩薩の地に入った者	⑦遍満の位
(9) 無上位	仏陀となった者	⑧無上なる位
(10) 勝解行位	勝解行地	③不浄位
(11) 証入位	第一歡喜地	④不浄かつ清浄の位
(12) 出離位	第二～七地 ^⑨	④ "
(13) 受記位	第八不動地	④ "
(14) 弁説位	第九善慧地	④ "
(15) 灌頂位	第十法雲地	④ "
(16) 証得位	法身	⑧無上なる位
(17) 勝利位	受用身	⑧ "
(18) 成所作位	变化身	⑧ "

表中の(1)～(9)は、「対治の修習」における三乗に共通の三十七菩提分法の修習に対応した、三乗に共通の分位である。それに続く(10)～(18)は、修習における所縁、作意及び得られた果である涅槃のあり方が二乗に対して勝れているとされる、菩薩にとっての十地に基づく分位となっている。

さらに、世親釈及び安慧釈の第15偈に対する注釈の中では、十八分位を不浄、不浄かつ清浄、清浄の三種に分類している。世親釈では、(1)～(3)が不浄、(5)が不浄かつ清浄、(6)が清浄、と簡潔に示すのみだが、安慧は十八分位全体にわたって分類している^⑫。

まず、(1)～(3)(10)の諸々の分位は法界に対する汚れが全く滅せられていないから、不浄に分類される。続いて(4)(5)(7)(8)(11)～(15)の諸々の分位は、法界に対する煩惱がすでに滅せられたものと、まだ滅せられていないものの両者が存在しているから、不浄かつ清浄に分類される。そして、(6)(7)(9)(16)～(18)の分位は煩惱が残りなく滅せられているから、清浄に分類される。

1.1.2 果の獲得

「果の獲得」では、果が二つの分類によって説かれている。第一は、善 (kuśala) に関する五種の果であり、(1)善の器となること (bhājanatva)、(2)器であることの支配力 (ādhipatya) によって善がより勝れたものとなること、(3)過去に善を繰り返し修習することで善を喜ぶこと (ruci)、(4)現在に善法を繰り返し修習することで善根を成長させること (kuśalamūlaparipuṣṭi)、(5)障害を断滅して清浄 (viśuddhi) であること、である^⑬。

また、これらの五種の果は五果説によって解釈され、それぞれ順番に(1)異熟果 (vipāka-phala)、(2)増上果 (adhipati-p^o)、(3)等流果 (niṣyanda-p^o)、(4)士用果 (puruṣakāra-p^o)、(5)離繫果 (visaṃyoga-p^o) に対応している^⑭。

第二の果の分類は、前述の「対治の修習の分位」における十八分位のうち、特に三乗に共通する分位として挙げられていたものに対応関係が見られる十種の果である。その内訳及び対応関係を示すと以下のようなものである。

十種の果	対応する分位
①後がより上位となる果 (uttarottra-p ^o)	
②最初の果 (ādi-p ^o)	(4) 果位
③繰り返し習う果 (abhyāsa-p ^o)	(5) 有所作位
④完成に達した果 (samāpti-p ^o)	(6) 無所作位
⑤因に随順する果 (ānukūlya-p ^o)	
⑥対立することの果 (vipakṣa-p ^o)	(4) 果位

⑦束縛から離れた果 (visaṃyoga-p°)	(5) 有所作・(6) 無所作位
⑧勝れた果 (viśeṣa-p°)	(7) 殊勝位
⑨より上位の果 (uttara-p°)	(8) 有上位
⑩無上なる果 (anuttara-p°)	(9) 無上位

2. 三十七菩提分法について

上述のように MAV 第 4 章では、修習に関する項目が三つに分けられ、そのうちの第一の項目「対治修習」(Pratipakṣabhāvanā) において、三十七菩提分法の細目が説かれている。三十七菩提分法は、初期仏教以来、脈々と受け継がれ修されてきた修行方法の一つであるので、菩薩のみならず声聞・独覚も修するものであり、大乘に特有の修行方法ではない。

三十七菩提分法 (saptatīṃśad bodhipakṣadharmā) は、通常、四念処 (catvāri smṛtyupa-sthānāni)、四正勤 (catvāri samyakprahāṇāni)、四神足 (catvāra ṛddhipādāḥ)、五根 (pañca indriyāṇi)、五力 (pañca balāni)、七菩提分 (sapta bodhyaṅgāni)、八正道 (aṣṭa mārgāṅgāni) を数え、悟りに至るための助法 (bodhipakṣa) をいう。三十七菩提分、三十七道品などの別名でも呼ばれる^⑮。それら七種の細目は以下のようである。

- | | |
|----------------|-------------------------------|
| (1) 四念処 (四念住) | 身不浄・受苦・心無常・法無我 |
| (2) 四正勤 (四正断) | 断断・律儀断・随护断・修断 |
| (3) 四神足 (四如意足) | 欲神足・勤神足・心神足・観神足 |
| (4) 五根 | 信・勤・念・定・慧 |
| (5) 五力 | 信・勤・念・定・慧 |
| (6) 七菩提分 | 念覚支・択法覚支・勤覚支・喜覚支・軽安覚支・定覚支・捨覚支 |
| (7) 八正道 | 正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定 |

これら各項目は本来個別に初期仏教の段階から重要な教説として説かれたものである。初期経典の随所にこの修行方法は数多く説かれているが、その多くが四念処の理解を中心に解説がなされており、それが諸部派にも受け継がれている。代表的なものとしては、『相應部 (Saṃyuttanikāya: SN)』第 5 章「小品 (Mahāvagga)」が挙げられ、そこでは、三十七菩提分法の各支分及び修行道における重要な教説が示されており、目次として列挙されているが、順序は多少異なっている^⑯。

他にも、『増一阿含経』や『大般涅槃経』などにも説かれている^⑰。その後、三十七菩提分法は『法蘊足論』^⑱を初めとする初期アビダルマ諸論書、さらには『婆沙論』や『俱舍論』(Abhidharmakośabhāṣya: AKBh)によって、体系化されていく^⑲。そして、その体系が大乘にも取り入れられ、二乗の上に位置づけられた瑜伽行派の菩薩道に組み込まれていくのである。

2.1 三十七菩提分法解釈におけるアビダルマと瑜伽行派の相違

アビダルマにおける三十七菩提分法は『法蘊足論』を初めとする初期有部論書を承けて最終的にAKBhにまとめられ、体系化されている^⑳。AKBhにおける三十七菩提分法については、近年では岸[2013]によって詳細な考察が為されている。これを基に以下、伝統的修道体系に組み込まれた三十七菩提分法修習のプロセスを諸論書の当該箇所によって検討していく。

まず、AKBh第6章「賢聖品」では、三十七菩提分法を伝統的修道階梯である三賢(順解脱分)、四善根(順決択分)、見道、修道に対応させて論じている。

これら〔三十七〕菩提分〔法〕のどれがいずれの分位において強力となるのか。

初〔業〕・順決択分において、修〔道〕において、及び見〔道〕において順次に七類が〔強力となる〕。(VI. 70)

(1)初〔業〕位においては、身体などを観察するために、〔四〕念処が〔強力となる〕。(2)煖〔位〕においては、〔より〕勝れた証得によって勤が増長するから、〔四〕正勤が〔強力となる〕。(3)頂〔位〕においては、退失することのない善根によって〔次の忍位への〕趣入があるから〔四〕神足が〔強力となる〕。(4)忍〔位〕においては、再び退失することがなく増上を得ているから、〔五〕根が〔強力となる〕。(5)〔世〕第一法〔位〕においては、煩惱によって屈服させられることはないから、あるいは、他の世俗的な法によって屈服させられることはないから、〔五〕力が〔強力となる〕。(6)修道においては、菩提に近いから、〔七〕菩提分が〔強力となる〕。(7)見道においては、行くこと(gamana)に関して強力となるから、〔八〕聖道が〔強力となる〕。これは速やかに行くからである。けれども、数による順序によって規定するために、先に七〔菩提分〕が説かれ、後に八〔聖道〕が〔説かれている〕。その中で、択法党支は菩提であり、かつ菩提分である。正見は道であり、かつ道分である。〔以上のように〕諸々の毘婆沙師は〔言う〕^㉑。

このAKBhにおいて毘婆沙師説とされる解説を見ると、それぞれ修道階梯との対応関係は以下^㉒のようになる。

初業位（順解脱分）	→	四念処	
煖位	}（順決択分）	→	四正勤
頂位		→	四神足
忍位		→	五根
世第一法位		→	五力
見道	→	八聖道	
修道	→	七菩提分	

続いて、その直後に説示される「他説」すなわち世親の自説と見なされる記述では以下のよう
に解説される。

また、他の者たちは、〔修道階梯の〕次第を破壊することなく、〔三十七〕菩提分〔法〕の
順序を説明する。まず初めに、多種の対境に対して散乱・拡散する覚知を抑制するために、
〔四〕念処が〔強力となる〕。「〔これら四念処は〕心を繋ぎ止めるものである。乃至食着を
依り所として記憶を想起することを排除するためである^②」と経中に説かれているからである。
〔次に〕その〔四念処〕によって勤が増長するから、四種の為すべきことを遂行する
ために、正しく心を保つ故に、〔四〕正勤が〔強力となる〕。それから、三昧を浄化するこ
とによって、〔四〕神足が〔強力となる〕。〔続いて〕三昧を依り所として、信などは出世
間法の増上〔縁〕となる〔から〕、〔五〕根が〔強力となる〕。そして、その同じ所対治の
現行が克服されている〔場合〕は、〔五〕力である〔から〕、〔五力が強力となる〕。見道に
おいては、〔七〕菩提分が〔強力となる〕。〔なぜなら〕最初に法の真実を観ずるからであ
る。両〔道〕においては、〔八聖〕道分が〔強力となる〕。すなわち、〔経中に〕「実に、八
聖道支が修習を完成するとき、四念処が修習を完成し、乃至七菩提分が〔修習を完成す
る〕」と説かれる。さらにまた、「如実の言葉を語るといふこれは、比丘たちよ、四聖諦の
譬喩である。比丘よ、来た通りの道で帰るといふこれは八聖道の譬喩である」と説かれる。
したがって、八聖道は両〔道〕において認められるべきである。〔以上のように、三十七
菩提分法の〕次第は確定する^②。

世親の説では、四念処～五力までは順序の説明のみに終始しており、具体的な修道階梯との
対応関係はあえて触れられていない。しかし、七菩提分・八聖道においては、まず、見道にお
いて七菩提分、そして見道・修道両方において、八聖道が修習されることが示されている。

(初業位) (順解脱分)	→	四念処		
(煖位)	}	(順決択分)	→	四正勤
(頂位)			→	四神足
(忍位)			→	五根
(世第一法位)	→	五力		
(見道)	→	七菩提分・八聖道		
(修道)	→	八聖道		

一方、初期瑜伽行派の文献である『瑜伽師地論』本地分「声聞地」(Śrāvakabhūmi: ŚBh) の解説²⁵を見ると、まず、五力の解説の後、五根と五力を合わせて、四善根との対応関係を論じる箇所がある。それを以下に示す。

彼(修行者)はこれらの〔五〕根と〔五〕力を修練し、修習し、多修することによって、順決択分における上・中・下の諸善根を起す。それはすなわち、煖〔位〕、頂〔位〕、諦に順ずる忍〔位〕、世第一法〔位〕である。

例えば、まさに、火によって火の所作を為そうとするある者が、火を求めて乾木(adharāraṇi)の上に引火木(arāṇi)を置いて、摩擦しながら耐え忍び、勤しみ、精進する。その者が、耐え忍び、勤しみ、精進すると、その最初に乾木に熱が生じる。またその熱は高まりながら、上昇する。〔熱は〕一層高まり、炎のない火を発生させる。火が発生したのと同時に、まさに炎が生じる。炎が発生し、生じ、起こるにしたがって、〔彼は〕火の所作を為すことになる。〔火を起そうと〕摩擦することに努力するように、そのように五根の修習があると見なされるべきである。最初に乾木によって煖〔という熱〕が起きるように、そのように煖が〔起きる〕と見なされるべきである。〔煖は〕先行する諸因であり、火の中にある煩惱を焼き尽くす無漏法を生起するためにある。まさにかの煖〔という熱〕が上昇するように、そのように頂があると見なされるべきである。煙が現生するように、真実に順ずる忍があると様に見なされるべきである。炎のない火が発生するように、そのように世第一法があると見なされるべきである。その直後に炎が生起するように、そのように出世間の有漏法があると見なされるべきである。それらは世第一法に摂められる五根(五力)²⁶の直後に生起する。

ŚBhでは、四念処から四神足を修道階梯に対応させて解説する文脈は見られず、また、初業位に関する記述も見られない。ここでは、火の生成の喩えを用いて、煖・頂・忍・世第一法

のそれぞれの分位を表現している。まず、摩擦によって生じる熱を煖位として示し、その熱の温度上昇の最大値を頂位と示している。さらに、その温度上昇によって生じる煙を忍位として、そして、炎のない火、すなわち炎として顕現する直前の状態を世第一法位として示している。

彼は、その時に初めに〔七〕菩提分を得て、有学の者で見位のものとなる。〔そこで〕彼にとって見所断の諸煩惱は断ぜられるが、修所断〔の諸煩惱〕は残されている。彼はそれらを断滅するために、三蘊の八聖道分を修するのである。

このように、七菩提分を得るのは見位、すなわち見道においてであり、そこで見所断の煩惱が断滅され、残る修所断の煩惱は修道において八聖道を修することによって断滅することができる。以上のようなSBhにおける三十七菩提分法と修道階梯の対応関係を示すとこのようになる。

初業位（順解脱分）	→	⑤ 一
煖位	→	五根
頂位	}（順決択分）	→（五根）
忍位		→ 五力
世第一法位	→	（五力）
見道（見位）	→	七菩提分
修（道）	→	八聖道

そして、MAVBhでは、その修習プロセスを以下のようにまとめることができる。修行者はこれらの各支分を四念処から順に修習していくが、ここでは各支分と修習階梯を対応させつつ論じている。

まず、四諦へ悟入するために、四念処を修習するといひ、次に、四念処の最後の項目である法念処を修習することによって、修習における対治・所対治を理解し所対治を離れ、対治である菩提分法を得ようとする意欲（勤）が四種類生じ、それら四正勤を修習する。続いて、その四正勤を得ると、心が安住し意のままにはたらく（堪能性 *karmanyatā*）ようになり、三昧が得られる。このような、すべての利益を成就させるものが四神足である。続いて、この四神足によって堪能性を得た者が、順解脱分に善根を植えることで、信・勤・念・定・慧の五根が修される。さらに、信などの五根の修習を重ねて、より力を持ったものとなると、同じ信などの五力を修習する。修行者は順解脱分において五根を修習した後に、順決択分へ趣入するが、こ

の順決択分には五根と五力の両方がそれぞれ配当されている。すなわち、そのうちの煖と頂の段階では五根を、忍と世第一法の段階では五力を修習するとされている。

そして、五力を修習して見道に入った修行者は、そこで念覚支を初めとする七菩提分を修習する。最後に、七菩提分を修習して修道に入った修行者は、八聖道を修習し了悟するのである。以下に対応関係を示す。

初業位（順解脱分）	→	—
煖位	}（順決択分）	→ 五根
頂位		→ 五根
忍位		→ 五力
世第一法位		→ 五力
見道（見位）	→	七菩提分
修（道）	→	八聖道

以上、伝統的修道体系に組み込まれた三十七菩提分法修習のプロセスにおいて、伝統的修道階梯である三賢、四善根、見道、修道との対応関係を、AKBhと瑜伽行派の文献に基づいて比較検討した。その結果、注目すべき点は見道・修道と七菩提分・八聖道との関係である。AKBhにおける毘婆沙師説、すなわち有部における伝統的な説では、見道に八聖道、修道に七菩提分を配当する。しかし、世親はこれらの関係を入れ替え、見道に七菩提分、修道に八聖道を配当している。このAKBhにおける世親の解釈は、数の配列順に三十七菩提分法を理解しており、古師（pūrvācārya）すなわち瑜伽師の説を念頭に置いて、世親自らAKBhに取り込んだと考えるべきであろう。しかしながら、AKBhと初期瑜伽行派文献における初業位～世第一法位の修道階梯と三十七菩提分法各々との配当関係の相違に関しては、さらなる検討の余地がある。

2.2 瑜伽行派における三十七菩提分法の大乗的解釈

瑜伽行派において、伝統的修道論に基づく三十七菩提分法は、アビダルマにおいて体系化されたものを受け継ぎ、同時に新たな解釈も打ち出しており、諸論書間で思想的変遷も見られる。具体的な論書を挙げると、『瑜伽師地論』本地分「菩薩地」（*Bodhisattvabhūmi*: BBh）及びŚBhをはじめとして、『大乘阿毘達磨集論』（*Abhidharmasamuccaya*: AS）及び『大乘阿毘達磨雜集論』（*Abhidharmasamuccayabhāṣya*: ASBh）、MAV第4章「対治修習品」、『大乘莊嚴經論』（*Mahāyānasūtrālamkāra*: MSA）第11章、18章などにわたって説かれている。^⑫

ここでは、瑜伽行派の文献に説かれる三十七菩提分法について、声聞などの二乗に対して菩薩特有の修習を述べる箇所を焦点を当て、伝統的修行方法である菩提分法をどのように菩薩行の中に組み込んで行ったのか、BBh、MAV、MSAの記述をもとに検討したい。

2.2.1 『菩薩地』における三十七菩提分法修習方法

まず、BBh第17章では、三十七菩提分法の各支分を一つ一つ解説することなく、それを修習することに関して、どのように理解されるかが説かれている。このBBhにおける三十七菩提分法に関しては、堀内〔2009〕に詳細な検討が為されている。

また菩薩は、どのように三十七菩提分法を勤修する (yogaṃ karoti^④) のか。ここで菩薩は、菩薩の四無礙解に依拠し、方便に摂受される知によって、三十七菩提分法を如実に知るのであって、これらを現証するのではない。彼(菩薩)は、二種の乗の道理によっても、それらを如実に知る。〔すなわち〕[a] 声聞乗の道理と [b] 大乘の道理によってである。そのうち、[a] 声聞乗の道理によって如実に知るのである。すなわち『声聞地』において、すべて示された通りに、そのように理解すべきである^④。

このようにBBhにおいて、菩薩は声聞乗の道理に従った三十七菩提分法と、大乘の道理に従った三十七菩提分法の両方を修習すると考えている。そして、声聞乗の道理に従った三十七菩提分法の修習内容に関してはŚBhの記述に従うとしている。そこでBBhは大乘の道理に従った三十七菩提分法の如実知について、四念処の身念処を例に、[b-1] 勝義と [b-2] 世俗の二諦に分類して、以下のように論じている。

[b-1] また、菩薩はどのように大乘の道理によって、三十七菩提分法を如実に知ることか。ここで菩薩は、身体における、身体に関する観察 (kāyānudarśin) に住しつつ、身体を身体存在 (kāyabhava) として、決して分別しない。さらに、あらゆるあり方で、一切は非存在であるとも〔分別〕しない。また、それ(身体)を身体の離言自性なる法性 (kāyanirabhilāpyasvabhāvadharmtā) として如実に知る。これが彼(菩薩)にとっての勝義としての、身体において、身体に関する観察が念処である。

[b-2] 一方、世俗の道理では、菩薩にとっての無量なる知〔によって〕確定する道理に随順し、身体における、身体に関する観察が念処である、と知られるべきである。身体における、身体に関する観察が念処であると同様に、残りの念処と残りの菩提分法が知られるべきである^⑤。

一般的に、四念処とは、身・受・心・法を、浄・楽・我・常のそれぞれの対治である、不浄・苦・無我・無常をもって観察することである。その場合の項目自体は、声聞などと菩薩は共通である。しかし、ここで説かれるように、大乘の道理に従う三十七菩提分法修習の方法は、「分別しない」ことと、「離言自性」として、すなわち言語表現されないものとして身体を観察することである。これが、菩薩にとっての身念処の修習であるとされる。

なお、ここでの「大乘の道理」とは「世俗の道理」に対比されていることからわかるように「勝義の道理」を意味している。そして、この勝義的道理で如実に知られるべき対象、すなわち勝義的存在が「離言自性という法性」と呼ばれている。これは BBh における勝義存在についての特徴的な表現である。以下に用例を挙げる。

実に、かの菩薩は深く入った法無我の智によって、一切法は離言自性を持つもの (nir-abhīlāpyasvabhāvatā) であると如実に理解し、いかなる法も、いかなる仕方でも分別しない。実事のみ (vastumātra) [すなわち] 真如のみ (tathatāmātra) を把握する他ない。また、「これは実事のみである」、「これは真如のみである」と、このようにも彼は考えない。そして、目的に向かって菩薩は行動し、最高の目的に向かって行動している菩薩は、一切法をその真如とまったく同等のものとして、如実に智慧によって見る。^⑩

2.2.2 『中辺分別論』における三十七菩提分法修習方法

MAV では、第4章「対治修習品」において、三十七菩提分法の各支を解説し終わった後、「対治修習の区別」(Pratipakṣaprabheda) という項目において、菩提分法の修習方法に関して菩薩と二乗との区別を説いている。

しかし、諸菩薩には、

①所縁、②作意、③得られた【結果】という点で、彼ら【声聞・独覚】よりも勝れているという性質がある。(IV. 12cd)

①実に、声聞や独覚たちにとっては、自己の相続としての身体などが所縁である。諸菩薩にとっては、自己と他者の相続としての【身体などが所縁である】。②声聞や独覚たちは、無常などの行相によって、身体などを作意する。しかし、諸菩薩は認識しない実践で (anupalambhayogena)【身体などを作意する】。③声聞や独覚たちは、ただ身体などから離繫するため、【四】念処などを修習するのである。

【一方、】諸菩薩は離繫するためではなく、離繫しないためでもない。ただ無住处涅槃のために【修習】するのである。^⑪

ここで、菩薩にとっての三十七菩提分法の修習は、①自己と他者の相続としての身体などを所縁とし、②認識しない実践で (anupalambhayogena) 身体などに作意し、③離繫・不離繫のためではなく、ただ無住处涅槃のために修習するとされている。ここで、②認識しない実践 (anupalambhayoga) で作意するという点に注目したい。^⑧ anupalambhayoga という語自体は MAV の他の箇所には無いが、類似表現として、na upalabdhi や anupalabdhi という語が、MAV 第 1 章「相品」第 6 - 7 偈に見られる。そこでは、入無相方便相 (asallakṣaṇānupraveśopāyalakṣaṇam) が説かれている。

今、その同じ虚妄分別における、無相に悟入するための方便の相を説明する。

認識することに基づいて認識しないことが生じ、認識しないことに基づいて認識しないことが生じる。(I.6)

唯識を認識することに基づいて、対象を認識しないことが生じる。対象を認識しないことに基づいて、唯識さえも認識しないことが生じる。このようにして、所取・能取の無相に悟入するのである。^⑨

瑜伽行派の修行体系において、根源的思惟とされる入無相方便相^⑩は、所取・能取の執着を断じ、対象を「認識しないこと」に対して修習していくものである。この入無相方便相の認識のあり方を、菩薩にとっての菩提分法修習方法における「認識しない実践」に反映させていると考えられる。

2.2.3 『大乘莊嚴經論』における三十七菩提分法修習方法

MSA では、三十七菩提分法各支について、菩薩特有の修習方法を詳述している。MSA において三十七菩提分法が直接説示されているのは、第11章と第18章である。ここで MSA の四念処を解説する記述を検討すると、第18章第42-44偈には、

四念処を弁別して三偈がある。

念処の修習が十四の行相をもって行われるが、智慧ある者のそれは無比であり、それゆえに他のいずれよりも勝れている。(XVIII. 42)

十四〔の行相〕をもってとは何か。

(1)依止するから、(2)対治するから、同じくまた(3)悟入するから、(4)―(6)対象とすると、思考すると、獲得することとがあるから、勝れている。(XVIII. 43)

(7)―(8)順応すると、随従して行うとの二者より、(9)完全に知ると(10)生まれるとにより最

高であり、(11)量により、(12)最勝なることにより、(13)―(14)修習と証得とによって〔勝れて^⑩いる〕のである。(XVIII. 44)

とあり、四念処が十四行相の観点から解説されている。それらを列挙すると、

(1)根拠・(2)対治・(3)悟入・(4)認識対象・(5)作意・(6)獲得・(7)順応すること・(8)随順すること・(9)遍知すること・(10)生まれ・(11)分量・(12)最勝なること・(13)修習・(14)証得

となる。^⑪十四行相によって修習するものとしてまとめられた四念処の内容は、他の論書では見られず、MSA 独自の解釈と考えられる。

さらに、第44偈に続く世親釈では、

どうして悟入によってなのかといえば、[以下のように答える]。四念処によって、順次に苦〔諦〕・集〔諦〕・滅〔諦〕・道諦に悟入するからであり、自らと他者とを悟入させるからである。『中辺分別論』に説かれるごとくである。^⑫

MSABh では、自己のみならず自他ともに悟入するというのが、大乘が二乗と区別される点である。ここで、引用される MAV の文言は ASBh に見られる四念処の解説に近く、^⑬身体を観察することによって、鹿重 (daṣṭhulya) であることを理解し、苦諦に悟入すること以下、受・心・法によって、集諦・滅諦・道諦にそれぞれ悟入することが強調されている。さらに、(4)認識対象～(6)獲得の観点は、先に挙げた MAV の菩薩の優位性を示す三つの観点に該当する。

このように、MSA における菩薩特有の三十七菩提分法修習に関する記述は詳細であるが、これが MAV を承けていることは明白であり、同一趣旨のものを意図していると考えられる。

結

三十七菩提分法の修習において、菩薩と二乗に差異が設けられているが、これは菩提分法各支の項目に差異があるのではなく、その修習方法に差異があることを意味している。すなわち、菩薩特有の三十七菩提分法修習方法は、BBh では菩提分法各支を「分別しない」または「離言自性」として修習することである。一方、MAV では、「認識しない実践」によって、入無相方便の認識のあり方をもって、修習するということが意図されている。また、MSA では MAV の記述を引用しつつ、さらに菩薩にとっての四念処を MSA 独自の十四行相をもって解

釈することで、より菩薩の優位性を強調していると考えられる。

略号

- ADV *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti*, ed. by P. S. Jaini, Patna, (2nd ed.): Kashi Jayaswal Reserch Institute, 1977 (1st ed. in 1959).
- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu), ed. by Prahlad Pradhan, *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series vol.8, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1967.
- AKVy *Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra), ed. by Unrai Wogihara, *Sphāārthā Abhidharmakośavyākhyā*, Association of Abhidharmakośavyākhyā, Tokyo, 1932-1936.
- AS *Abhidharmasamuccaya* (Asaṅga), ed. by V.V.Gokhale, *Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga*, Journal of the Poyal Asiatic Society, Bombay, N.S.23, 1947.
- ASBh *Abhidharmasamuccayabhāṣya* (Jinaputra), ed. by Nathmal Tatia, *Abhidharmasamuccayabhāṣyam*, Tibetan Sanskrit Works Series vol.17, Kashi Prasad Jayaswal Reserch Institute, Patna, 1976.
- ASVY *Abhidharmasamuccayavyākhyā* (Jinaputra), sDe dge edition (D), No.4054. Peking edition (P), No.5555.
- BBh
- [D] *Yogācārabhūmau Bodhisattvabhūmi* (Maitreya), ed. by Nalinaksha Dutt, *Bodhisattvabhūmi, Being the XVth Section of Asaṅgapada's Yogācārabhūmi*, K.P. Jayaswal Reserch Institute, Patna, 1966.
- [W] *Yogācārabhūmau Bodhisattvabhūmi* (Maitreya), ed. by Unrai Wogihara, *Bodhisattvabhūmi: A Statement of Whole Course of the Bodhisattva (Being Fifteenth Section of Yogācārabhūmi)*, Seigo Kenkyukai, 1936. repr. by 山喜房佛書林.
- MAV *Madhyāntavibhāga-kārikā* (Maitreya). See MAVBh [Na]
- MAVBh
- [Na] *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Vasubandhu), ed. by Gadjin Nagao, *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, 鈴木学術財団 1964.
- [Ta] *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Vasubandhu), ed. by Nathmal Tatia & Anantalal Thakur *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1967.
- MAVṬ
- [Bh/T] *Madhyāntavibhāga-ṭikā* (Sthiramati), ed. by Vidhushekhara Bhattacharya & Giuseppe Tucci, *Madhyāntavibhāgasūtrabhāṣyaṭikā of Sthiramati: Being a Subcommentary on Vasubandhu's Bhāṣya on the Madhyāntavibhāgasūtra of Maitreya* Pt. I, Luzac & Co., London. 1932.
- [Pa] *Madhyāntavibhāga-ṭikā* (Sthiramati), ed. by Ramchandra Pandeya *Madhyāntavibhāgaśāstra: Countaining the Kārikā-s of Maitreya, Bhāṣya of Vasubandhu and Ṭikā by Sthiramati*, Motilal Banarsidass, Delhi, 1971.
- [Y] *Madhyāntavibhāga-ṭikā* (Sthiramati), ed. by Susumu Yamaguchi *Madhyāntavibhāgaṭikā*, 破塵閣 1934, repr. 鈴木学術財団 1966.
- MSA *Mahāyānasūtrāḷḅakārikā* (Maitreya), see MSABh.

- MSABh *Mahāyānasūtrālamkārahāṣya* (Vasubandhu), ed. by Sylvain Lévi, *Mahāyānasūtrālamkāra*. Honoré Champion, Paris, 1907.
- MSAṬ *Mahāyānasūtrālamkāra-ṭikā*, D4029, P5530.
- Msg *Mahāyānasamgraha*, D4048, P5549, ed. see 長尾 [1982], [1987].
- Mvy *Mahāvvyutpatti*, 『梵藏漢和四訳対校翻訳名義大集』鈴木学術財団 1961.
- PsP *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, ed. by Dutt, N. second Repr. 2000.
- SAVBh *Sūtrālamkāra-vṛttibhāṣya*, D4034, P5531.
- ŚBh *Śrāvakabhūmi*, see 声聞地研究会 [2007].
- [Sh] *Śrāvakabhūmi of Ācāryā Asaṅga*, ed. by Shukla, Karunesha. Patna, 1973.
- TrBh *Triṃśikābhāṣya* (Sthiramati), ed. by S. Lévi, *Vijñāptimātrāsiddhi, Deux Traités de Vasubandhu, Viṃśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une Explication en Prose et Triṃśikā (la Trentaine) avec la commentaire de Sthiramati*, Paris, 1925. ed. by H. Buescher, *Sthiramati's Triṃśikāvijñāptibhāṣya: Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation*, Wien, 2007.
- 『婆沙論』 『阿毘達磨大毘婆沙論』玄奘訳, T. 27, 1545
- 『顯揚論』 『顯揚聖教論』玄奘訳, T. 31, 1602
- 『法蘊足論』 『阿毘達磨法蘊足論』玄奘訳, T. 26, 1537

参考文献

Anacker, Stefan

[1984] *Seven Works of Vasubandhu: The Buddhist Psychological Doctor*, Motilal Banarsidass, Delhi.

Bronkhorst, Johannes

[1985] “*Dharma and Abhidharma*”, Bulletin of the School of oriental and African Studies, 48-2, pp. 305-320.

De Jong, Jan Willem

[1979] “*Notes on the Second Chapter of the Madhyāntavibhāgatikā*”, Buddhist Studies, Asian Humanities Press, Berkeley, pp. 589-595.

Gethin, R.M.L.

[2001] *The Buddhist Path to Awakening*, Oxford: Oneworld Publications (2nd edition).

Kritzer, Robert

[2005] *Vasubandhu and the Yogācārabhūmi: Yogācāra Elements in the Abhidharmakośabhāṣya*, STUDIA PHILOLOGICA BUDDHICA Monograph Series XVIII, Tokyo.

Stcherbatsky, Theodore

[1936] *Madhyānta-vibhāga: Discourse on Discrimination Between Middle and Extremes / Ascribed to Bodhisattva Maitreya and Commented by Vasubandhu and Sthiramati; Bibliotheca Buddhica 30; repr. by Motilal Banarsidas Publishers, Delhi, 192.*

Wayman, Alex

[1961] *Analysis of the Śrāvakabhūmi Manuscript, University of California publications in classical philology 17*, University of California Press, Berkeley.

池田練太郎

[1997] 「〈三十七菩提分法〉説の成立について」『印度学仏教学研究』90, pp. 106-111.

石川美恵

[1993] 『二卷本訳語釈：和訳と註解』東洋文庫

小沢慧珠

[1975a] 「三十七道品と菩薩道」『大正大学研究紀要（仏教学部・文学部）』61, pp. 65-78.

[1975b] 「瑜伽論における三十七菩提分法」『印度学仏教学研究』46, pp. 231-234.

岸 清香

[2013] 「『大乘莊嚴經論』第十八章「菩提分品」の研究—初期瑜伽行唯識学派における菩薩行について—」筑波大学博士学位請求論文

金 敬姫

[2013] 「説一切有部における現觀道形成の研究」大谷大学博士学位請求論文

金才権

[2007a] 「『中辺分別論釈疏』における prabhāvita の語義」『印度学仏教学研究』55-2, pp. 75-78.

[2007b] 「『中辺分別論』における三性説の研究」龍谷大学博士学位請求論文

斎藤 明他

[2011] 「『俱舎論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集—仏教用語の用例集（パウワグコーシャ）および現代基準訳語集 1—」インド学仏教学叢書14, 山喜房佛書林

[2014] 「瑜伽行派の五位百法—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—パウワグコーシャ II」インド学仏教学叢書16 山喜房佛書林

齋藤 滋

[2007] 「三十七菩提分法の成立について」『パーリ学仏教文化学』21, pp. 65-78.

櫻部 建・小谷信千代

[1999] 「俱舎論の原典解明 賢聖品」法蔵館

篠田正成

[1966a] 「阿毘達磨雜集論に於ける修行道」『筑紫女学園大学短期大学紀要』22, pp. 1-15.

[1966b] 「雜集論・中辺分別論・莊嚴經論における三十七菩提分法について」『筑紫女学園大学短期大学紀要』23, pp. 1-16.

[1985] 「阿毘達磨雜集論における菩薩思想において—撰大乘論と比較して—」『日本仏教学会年報』51, pp. 157-175.

下田 正弘

[1985] 「四念処に於ける不浄観の問題」『印度学仏教学研究』66, pp. 545-546.

声聞地研究会

[2007] 「瑜伽論声聞地 第二瑜伽処—サンスクリット語テキストと和訳—」大正大学総合仏教研究所研究叢書第18巻 山喜房佛書林

高橋晃一

[2005] 「『菩薩地』『真實義品』から『撰決撰分中菩薩地』への思想展開」山喜房佛書林

田中教照

[1993] 「初期仏教の修行道論」山喜房佛書林

長尾雅人

[1962] 「中辺分別論の梵文写本」『東方學論集 東方學會創立十五周年記念』東方学会 pp. 182-193.

[1976] 「大乘仏典15世親論集」『中辺分別論』中央公論社

[1978a] 「『中辺分別論安慧釈』の梵写本との照合 —その第一章相品について—」『鈴木學術財団

- 研究年報』15, pp. 16-22.
- [1978b] 『中観と唯識』岩波書店
- [1982] 『撰大乘論一和訳と注解一上』講談社
- [1987] 『撰大乘論一和訳と注解一下』講談社
- [2009] 『『大乘莊嚴經論』和訳と註解 長尾雅人研究ノート(3)』長尾文庫
西村実則
- [1993] 『『俱舍論』における三十七道品』『宗教研究』295, pp. 191-192.
- 早島 理
- [1973a] 『Mahāyānasūtrālaṃkāra における菩薩道の構造 一第VI章tatvaを中心として一』『印度学仏教学研究』21-2.
- [1973b] 『菩薩道の哲学 一『大乘莊嚴經論』を中心として一』『南都仏教』30.
- [1974] 『瑜伽行唯識学派における入無相方便相の思想』『印度学仏教学研究』22-2.
- [1982] 『唯識の實踐』講座・大乘仏教8 唯識思想 春秋社 pp. 145-176.
- [2000] 『梵蔵漢対校E-TEXT 『大乘阿毘達磨集論』・『大乘阿毘達磨雜集論』』瑜伽行思想研究会
兵藤一夫
- [1990] 『四善根について一有部に於けるもの一』『印度学仏教学研究』76, pp. 73-81.
舟橋尚哉
- [1976] 『初期唯識思想の研究』国書刊行会
- 堀内俊郎
- [2009] 『世親の大乘仏説論 一『釈軌論』第四章を中心に一』山喜房佛書林
- 松下俊英
- [2012] 『瑜伽行唯識学派における菩薩道：『中辺分別論』第2章「障品」の解説研究を通して』大谷大学博士学位請求論文
- 三友健容
- [2007] 『アビダルマディーパの研究』平楽寺書店
- 山口 益
- [1935] 『安慧阿闍梨耶造・中辺分別論釈疏』破塵閣 Repr. 鈴木学術財団 1966.
- [1937] 『漢蔵対照弁中辺論：付・中辺分別論釈疏梵本索引』破塵閣
- 葉 阿月
- [1975] 『唯識思想の研究—根本眞実としての三性説を中心として—』国書刊行会
- 吉元信行
- [1990a] 『原始仏教における三十七道品の形成』『仏教学セミナー』52, pp. 15-27.
- [1990b] 『三十七道品における五根・五力の位置』『印度学仏教学研究』77, pp. 17-22.
- [2000] 『アビダルマ仏教における三十七菩提分法の体をめぐって』『アビダルマ仏教インド思想加藤純章博士還暦記念論集』春秋社

註

① MAVṬ; Skt. [Y (Appendice): 270, 21-24 Pa: 191, 17-19]*

etad

śāstraṃ madhyavibhāgasya, (V. 30a)

yasmād evaṃ asmiñ chāstre śāsvatocchedāntavigatā madhyamā pratīpat pradarsītā
tasmād etac chāstraṃ madhyavibhāga ity uktam, madhyasya vivaraṇaṃ prakāśaś cety

arthaḥ / madhyāntavibhāgam apy etan, atra kāraṇam āha, madhyasyāntayoś ca prakāśanād
iti / ato madhyāntavibhāga ity ucyate / tatra madhyam hy advayadharmadhātuḥ / antas tu
samāropo 'pavādaś ca / ādyapara varjitasya madhyasya vā prakāśanād iti tathatām ity eke,
anye tv āhuḥ, abhūtaparikalpaḥ madhyāntavigataḥ ity atra madhyāntam iti sambandhaḥ /
これは、

実に、中を弁別する論である。(V. 30a)

このように、この論では常と断の〔兩〕辺を離れた中道が説示されているから、この論は「中の弁別」と言われている。中の解明、また明示という意味である。〔また、〕これは中と辺とを弁別する〔論〕でもある。ここで理由を述べて、中と二辺を明示するからであるという。それゆえ、「中と辺との弁別」と言われる。そのうち、実に、中とは不二の法界である。一方、辺とは増益と損減である。あるいは、始・終を離れた、中を〔明示するからである〕とは、「真如を〔明示する〕」とある者たちは〔言う〕。一方、他の者たちは、「中と辺を遠離した虚妄分別を〔明示する〕」と云う。ここでは、〔それが〕「中と辺」であるという文脈である。

Cf. 長尾 [1976: 409 (n. 172)]

* 本稿で引用するMAVṬは筆者が適宜Yを再校訂した部分があるが、その一々を注記することは省略した。

② 長尾 [1976: 398] は「七つの意味」が本論の内容であり、それらが7章を形成する。しかし、底本は全5章としている」として、七義五品と七義七品の可能性を示している。

③ MAVBh; Chi. [真諦訳T31, 460b3-5]

中邊分別論中此處有四三品。一對治品。二修住品。三得果品。已廣說究竟。

④ MAVṬ; Skt. [Y: 7, 10-15 Bh/T: 7, 20-25] Cf. 山口 [1935: 7]

vipakṣaprahāṇārtham pakṣaḥ pratipakṣaḥ, sa mārgaḥ / tadabhyāso bhāvanā / avasthā tasyaiva santānenotpattiviśeṣaḥ / sā punar ekānnaviṃśatiprakārā gotrāvasthādikā / phalasya lābhaḥ phalaprāptiḥ / tat punaḥ pañcadaśaprakāraṃ vipākaphalādi / yānānuttaryam iti yāyate 'neneti yānaṃ / yānaṃ ca tad anuttaryam ceti yānānuttaryam / tat punas trividhaṃ pratipattyānuttaryādi /

⑤ この引用文献については山口 [1934] でも未同定。

⑥ MAVṬ; Skt. [Y: 7, 24-8, 10 Bh/T: 8, 8-16 Pa: 8, 12-19]

tatas tenālamphanena tad āvaraṇaṃ yena prayogena kṣayo bhavati sā pratipakṣabhāvanā jñeyā / tatas tasyāṃ pratipakṣabhāvanāyāṃ vipakṣahānyā pratipakṣavṛddhyā cāvasthā jñeyā gotrāvasthādikā / tato lokottaradharmābhīmukhikaraṇaṃ phalāni, srotāpannaphalādiṇi vedītavayāni / sarvaṃ apy etat sōttarāc chrāvakādibhiḥ sādharmaṇaṃ bodhisattvānāṃ yathoktaṃ sūtre sa pravrajitaḥ śrāvakaśikṣācāragocarasaṃmudācāram api śikṣate pratyekabuddhaśikṣācāragocarasaṃmudācāram api śikṣate bodhisattvaśikṣācāragocarasaṃmudācāram api śikṣate / bodhisattvānāṃ tv anuttaryam asādhāraṇaṃ saptaṃ rtha anuttaryam /

⑦ MAVṬ; Skt. [Y: 8, 14-15 Bh/T: 8, 8-16 Pa: 8, 12-19]

tatprahāṇopāyapradarśanārtham tataḥ saparivārapratipakṣo mārgaḥ /

⑧ Cf. 長尾 [1976: 424]、三穗野 [2003a: 32]

⑨ [avasthāpiṇḍārtha] (MAVBh; Skt. [Na: 58, 12-15 Ta: 36, 3-6])

⑩ 長尾 [1976: 424] の表では第六地、三穗野 [2003a: 32] の表では第六顕現地となっているが、以下のMAVBh本文を見る限り、両者は誤りである。

MAVBh; Skt. [Na: 56, 15 Ta: 34,11] Cf. 長尾 [1976: 326]

niryāṇāvasthā taduttarāsu ṣaṭṣu bhūmiṣu /

(12) 出離位は、それを越えたより高い六つの地（第二地から第七地）においてある。

- ① MAVBh; Skt. [Na: 56, 19 Ta: 34, 14 Ms: 20a1-2] Cf. 長尾 [1976: 326-327]

sarvāpy eṣā bahuvīdhāvasthābhisamasya veditavyā /

dharmadhātau tridhā punaḥ /

aśuddhāśuddhāśuddhā ca viśuddhā ca ya(20a2)thārhatāḥ // IV. 15bcd

tatrāśuddhāvasthā (1) hetvavasthām upādāya yāvat (3) prayogād aśuddhāśuddhāvasthā

(5) Saikṣāṇām / viśuddhāvasthā (6) aśaikṣāṇām /

これら多種類のすべての分位はまた、要略すれば、

法界の中において三種類であり、すなわち適宜に、不浄なると、不浄にして清浄なると、清浄なると、〔の三つ〕である。(IV. 15bcd)

と知るべきである。そのうち、不浄なる分位とは、因位を初めとして加行位に至るまでである。

不浄にして清浄なる分位とは、有学位である。清浄なる分位とは、無学位である。

- ② MAVṬ; Skt. [Y: 191, 17-192, 6 Pa: 143, 22-144, 6 Ms: 60b2-5]

sarvāpy eṣā bahuvīdhā 'vasthā 'bhisamasya veditavyā

dharmadhātau tridhā punaḥ // IV. 15b

iti / katham ity ata āha,

aśuddhāśuddhāśuddhā (60b3) ca viśuddhā ca yathārthataḥ / IV. 15cd

iti / tatrāśuddhāvasthā (1) hetvavasthām upādāya yāvat (3) prayogād iti hetvavatāra-prayogādhimuktyavasthā gr̥hyante / āsv avasthāsu dharmadhātor apraḥiṇaniravaśeṣa-malatvād aśuddhā 'vasthety ucyate / aśuddhāśu(60b4) ddhāvasthā (5) Saikṣāṇām ity atra ca phalasaḥkaraṇīyaviśeṣottaraḥpraveśaniryāṇavyākaraṇakathikābhiṣekāvasthā gr̥hyante / etāsv apy avasthāsu dharmadhātoḥ praḥiṇāpraḥiṇakleśatām upādāyāśuddhāśuddhāvasthety ucyate / viśuddhāvasthā (60b5) (6) 'Saikṣāṇām ity akaraṇīyaviśeṣānuttaraḥprāptyanuśaṃsā-kṛtyānuṣṭhānāvasthā viśuddhāvasthety ucyate, aśaikṣāṇām niravaśeṣakleśaprahāṇāt / 全てのこれら多種の分位は、要略すれば、〔以下のように〕知られるべきである。

さらに、法界において三種であり、(IV. 15b)

と〔言う〕。それはなぜかという、

〔すなわち、それぞれに〕ふさわしく、不浄な〔分位〕と、不浄かつ清浄な〔分位〕と、清浄な〔分位〕とである。(IV. 15cd)

と言う。そのうち、不浄な分位とは、(1) 因の分位を初めとして、(3) 加行の〔分位〕までであるというの、(1) 因と (2) 趣入と (3) 加行と (10) 信解の分位が含まれる。これらの分位において、法界はまだ汚れが悉く断じられていないから、不浄な分位と言われる。不浄かつ清浄な分位とは、(5) 諸々の有学の〔分位〕であるというの、さらにこのうち、(4) 果、(5) 為すべきことを有する、(7) 勝れた、(8) より上の、(11) 悟入における、(12) 出離における、(13) 授記における、(14) 説者たることにおける、(15) 灌頂における分位が含まれる。さらに、それらの分位において、法界の煩惱がすでに断じられたものとまだ断じられていないものがあることに基づいて、不浄にして清浄な分位と言われる。清浄な分位とは、(6) 諸々の無学の〔分位〕であるというの、(6) 為すべきことがなくなった、(7) 勝れた、(9) 無上なる、(16) 獲得することにおける、(17) 功德勝利における、(18) 為すべきことの遂行における分位が、清浄な分位と言われる。諸々の無学は煩惱を完全に断滅しているからである。

- ③ MAVBh; Skt. [Na: 57, 6-58, 5 Ta: 35, 1-19 Ms: 20a3-20b5]

[3. Phalaprāpti]

phalaprāptiḥ katamā /

(1)bhājanatvaṃ vipākākhyam (2)balan tasyādhipatyata(20a4)ḥ // IV. 16cd

(3)rucir (4)vṛddhir (5)viśuddhiś ca phalam etad yathākramam / IV. 17ab

(1)bhājanatvaṃ yaḥ kuśalānukūlo vipākaḥ / (2)balam yā bhājanatvādhipatyāt kuśalasyādhi-
mātratā / (3)rucir yā pūrvābhyāsāt ku (20a5) śalaruciḥ / (4)vṛddhir yā pratyutpanne kuśala-
dharmābhyāsāt kuśalamūlaparipuṣṭiḥ / (5)viśuddhir yad āvaraṇaprahāṇam /

⑭ MAVBh; Skt. [Na: 57, 13 Ta: 35, 7] Cf. 長尾 [1976: 328-329]

etad yathākramam phalam pañcavidham veditavyam / (1)vipākapha(20a6)lam (2)adhipati-
phalan (3)niṣyandaphalam (4)puruṣakārāphalam (5)viśamyogaphalaṅ ca /

⑮ 池田 [1997] にも言及されているように、初期仏教の段階では七つの項目が列挙されるのみで
あり、菩提分(法)というタームそのものは見られない。sattatiṃsa bodhipakkhiyadhammā の
語が現れるのは、「ミリンダ王の問い」(*Milindapañha*)、[Trenckner: 237] 「清浄道論」
(*Visuddhimagga*) [PTS: 670, 679] 等がある。Cf. 岸 [2013]

⑯ Cf. 吉元 [1990a: 15-16]

(1)道相應 (magga-samyutta)、(2)覚支相應 (bojjhaṅga-s°)、(3)念処相應 (satipaṭṭhāna-s°)、
(4)根相應 (indriya-s°)、(5)正勤相應 (sammappadhāna-s°)、(6)力相應 (bala-s°)、
(7)神足相應 (iddhipāda-s°)、(8)阿那律相應 (anuruddha-s°)、(9)禪相應 (jhāna-s°)、
(10)安般相應 (ānāpāna-s°)、(11)預流相應 (sotāpatti-s°)、(12)諦相應 (sacca-s°)。

⑰ 「増一阿含」 T2, 551a5, 「大般涅槃經」 T1, 193a2, etc.

⑱ 「法蘊足論」では、三十七菩提分法を各品に対応させて説いており、これを中心とした修行道の
特色を表している。Cf. 福原 [1965: 113-116]

⑲ これに関しては、先行研究として田中 [1986]、西村 [1993]、吉元 [2000] 等が挙げられる。

⑳ 岸 [2013: 48] の解説では以下のようである。Cf. 石川 [1993: 66-67]

「大毘婆沙論」の中では特に、四念処と七覚支・八正道との関係として七覚支を修道に、八正
道を見道に当てはめている。見道の後に修道へと入る阿羅漢の修行道としては順序が逆転して
いるように見受けられるが、従来の七覚支を重視する説を「大毘婆沙論」では採用していると
いえる」

「婆沙論」Chi. [玄奘訳T27, 726b21-28]

七覚支者。一念覚支。二擇法覚支。三精進覚支。四喜覚支。五輕安覚支。六定覚支。七捨覚支。
擇法即慧。喜即喜根。捨謂行捨。餘四如名即心所中各一爲性。已說自性當說所以。問何故此七名
覺支耶。答覺謂究竟覺。即盡無生智。或如實覺即無漏慧。七爲彼分故名爲支。擇法亦覺亦支。餘
六是支非覺。此七廣辯如餘處説

「婆沙論」Chi. [玄奘訳T27, 497a25-27]

評曰。應知此中前説爲勝。以修道位隣近菩提。順覺義勝故説覺支。

㉑ AKBh; Skt. [Pradhan: 384, 12-21] Cf. 櫻部・小谷 [1999: 434-435]

kasyām avasthāyām katame te bodhipakṣyāḥ prabhāvante /

ādikarmikanirvedhabhāgiyeṣu prabhāvitāḥ /

bhāvane darśane caiva sapta vargā yathākramam // VI. 70

ādikarmikāvasthāyām kāyādyupalakṣaṇārtham smṛtyupasthānāni / viśeṣādhigamena vīrya-
saṃbadhamnādūṣmagateṣu samyakpradhānāni / aparihāṇiyakuśalamūlapraveśatvāt
mūrdhaṣv ṛddhipādāḥ / apunaḥparihāṇita ādhipatyaprāptatvāt kṣāntiṣv indriyāṇi / kleśāna-

vamardaniyatvād agradharmeṣu balāni laukikānyadharmānavamardaniyatvād vā /
bodhyāsannatvāt bhāvanāmārgē bodhyaṅgāni / gamanaprabhāvitvād darśanamārgē mārgā-
ṅgāni / tasyāśugāmitvāt / saṃkhyānupūrvīvidhānārthaṃ tu pūrvasaptoktāni paścād aṣṭau /
tatra dharmapravicayasambodhyaṅgaṃ bodhir bodhyaṅgaṃ ca samyagdr̥ṣṭir mārgo
mārgāṅgaṃ ceti vaibhāṣikāḥ /

- ② アビダルマディーパ (*Abhidharmadīpa*: ADV) 第6章「賢聖品」でも、これと同様の解説が為されている。

ADV; Skt. [Jaini: 362] Cf. 三友 [2007: 692-693]

tatra smṛtyupasthānāny ādikarmikāvasthāprabhāvitāni kāyādisvabhāvopalakṣaṇāt /
samyakprahāṇāny ūśmagateṣu / tatra saṃsāranirvāṇayorādinavānuśamsadarśane balavad-
viryāśrayaṇāt saṃsārapāraṃ uttarati / mūrdhāvasthāyām ṛddhipādāḥ prabhāvante / teṣu
samādhibalalābhāc / cittanigrahe sati parihānyabhāvān na kadācid guṇadhanadaridro
bhavati / indriyāni kṣāntiṣv apāyātyantaniṣṭtau tadādhipatyāt / balāny agradharmeṣu
kleśān avamardaniyatvāt / bodhyaṅgānāṃ bhāvanāmārgē prādhānyaṃ / vāsīdaṇḍopamayā
mārgabhāvanayā niravaśeśakleśaprahāṇāt / navaprakāratayā vā malaprahāṇe sati bodher
āsannibhāvāt / darśanamārgē mārgāṅgāni / darśanaheyakleśaprahāṇārthaṃ āśu traidhātu-
kātikramaṇotpādāt / ānupūrvīvyatikramas tu deśanānukūlyāt //

そこで、〔まず〕身体などの自性を観察すること (upalakṣaṇa) から初業位である〔四〕念処が強力となる。緩に到達すると〔四〕正勤が〔強力となる〕。ここで、輪廻する場合、苦惱 (ādinava) が見られ、力強く勤を所依とするので輪廻から彼岸に渡る〔ことができる〕。頂位においては、〔四〕神足が強力になる。なぜなら、これら (四神足) において三昧が力を得るからである。心を調伏すれば、退転することがないから、〔頂位においては〕いかなるときでも功德と財の貧窮者とはならない。忍〔位〕においては、〔五〕根が〔強力となる〕。なぜなら、悪趣を完全に滅するのでこれら (五根) を増上にするからである。世第一法〔位〕においては、〔五〕力が〔強力となる〕。なぜなら、煩惱を制圧するべきであるからである。〔七〕菩提分は修道において勝れている。なぜなら、斧と杖に喩えられ、〔斧である見道と杖である修道という〕道の修習によって残り無く煩惱を断滅するからである。あるいは、〔修道の〕九品によって〔煩惱の〕垢を断滅するとき、菩提に近づくからである。見道においては、〔八〕聖道支が〔強力となる〕。なぜなら、速やかに (āśu) 見所断の煩惱を断滅するために、三界を超えて生ずるからである。一方、〔数の〕順序が入れ替わっているのは教説に随順するからである。

- ③ 『中阿含』 T1, 758b11. Cf. 櫻部・小谷 [1999: 441 (n. 3)]

- ④ AKBh; Skt. [Pradhan: 384, 21-385, 9] Cf. 櫻部・小谷 [1999: 438-439]

apare punar abhittvaiva kramaṃ bodhipakṣyāṇāṃ ānupūrvī varṇayanti / ādita eva tāvad
bahuvīdhaviśayavyāsekavisāriṇīnāṃ buddhināṃ nigrhārthaṃ smṛtyupasthānāni cetasa
upanibandhāni bhavanti yāvad eva gardhāśritānāṃ smarasaṃkalpānāṃ prativinodanāyeti
sūtre vacanāt / tadbaleṇa vīryasaṃvardhanāc caturvidhakāryasaṃpādanāya samyakcittaṃ
pradhātiti samyakpradhānāni / tataḥ samādhivīśodhanād ṛddhipādāḥ / samādhisaṃ-
niśrayeṇa lokottaradharmādhipatibhūtāni śraddhādīnindriyāni / tāny eva ca nirjitavipakṣa-
samudācārāni balāni / darśanamārgē bodhya ṅgāni prāṭhamato dharmatattvāvalokāt /
ubhayor mārgāṅgāni / tathā hy uktam āryāśṭāṅge khalu mārgē bhāvanāparipūrim gacchati /
catvāri smṛtyupasthānāni bhāvanāparipūrim gacchanti yāvat sapta bodhyaṅgāni / punaś
coktaṃ yathābhūtavacanārocanaṃ iti bhikṣavaś caturṅām āryasatyānāṃ etad adhivacanaṃ

yathāgatena mārgeṇa prakramaṇam iti bhikṣo āryāṣṭāṅgasya mārgasyaitad adhivacanam
iti / tasmād ubhayor āryāṣṭāṅgo mārga eṣṭavyaḥ / siddho 'nukramaḥ /

㉔ Cf. 岸 [2013: 51 (n. 113)]

㉕ 漢訳より補った。Cf. 声聞地研究会 [2007: 229 (n. 2)]

㉖ ŚBh; Skt. [Shukla: 324, 5-325, 16 Ms: 91a2-6] Cf. 声聞地研究会 [2007: 226-229]

sa eṣām indriyāṇām eteṣām ca balānām āsevanānvayād bhāvanānvayād bahulikārānvayān
nirvedhabhāgiyāni kuśalamūlāny utpādayati mṛdumadhyādhimātrāṇi / tadyathoṣmagatāni
mūrdhānaḥ satyānulomāḥ kṣāntayo laukikāgradharmāḥ /

tadyathā kaścīd eva puruṣo 'gnināgnikāryaṃ kartukāmo 'gninārthy adharāraṇyām uttarāra-
ṇiṃ pratiṣṭhāpyābhimathann utsahate ghaṭate vyāyacchate / tasyotsahato ghaṭato vyāya-
cchataś ca tatprathamato 'dharāraṇyām uṣmā jāyate / saiva coṣmābhivardhamānā ūrdhvam
āgacchati / bhūyasyā mātrayābhivardhamānā nirarciṣam agniṃ pātayati, agnipatana-
samanantaram eva cārcir jāyate / yathārciṣotpannayā jātayā saṃjātayāgnikāryaṃ karoti /
yathābhimanthanavyāyāma evaṃ pañcānām indriyāṇām āsevanā draṣṭavyā / yathā-
dharāraṇyā tatprathamata evoṣmagataṃ bhavaty, evam uṣmagatāni draṣṭavyāni / pūrvaṃ-
gamāni nimittabhūtāny agnisthāniyānām anāsravāṇāṃ dharmāṇāṃ kleśaparidāhakānām
utpattaye / yathā tasyaivoṣmaṇa ūrdhvam āgamanam evaṃ mūrdhāno draṣṭavyaḥ / yathā
dhūmaprādurbhāva evaṃ satyānulomāḥ kṣāntayo draṣṭavyaḥ / yathāgneḥ patanaṃ nirarciṣa
evaṃ laukikāgradharmā draṣṭavyaḥ / yathā tadanantaram arciṣa utpāda evaṃ lokottarā-
nāsravā dharmā draṣṭavyaḥ / ye laukikāgradharmasaṃgrhītānāṃ pañcānām indriyāṇāṃ
samanantaram utpadyante //

また、この煖位を火で喩えるものは、AKBhにも見られる。Cf. AKBh; [343, 12]、櫻部・小谷
[1999: 114]

㉗ 戒蘊・定蘊・慧蘊のことをいい、この後に続くŚBhの八聖道の解説の中で、八聖道の一々をこ
の三蘊に分類する説明が為されている。

㉘ ŚBh; Skt. [Shukla: 326, 9-11] Cf. 声聞地研究会 [2007: 230-231]

sa tasmin samaye tatprathamato bodhyaṅgalābhāc chaikṣo bhavati dṛṣṭapadaḥ // darśana-
prahātavyāś cāsya kleśāḥ prahiṇā bhavanti, bhāvanāprahātavyāś cāvāsiṣṭāḥ / sa teṣāṃ
prahāṇāya triskandham āryāṣṭāṅgaṃ mārgaṃ bhavayati /

㉙ ŚBhにおいて、初業位に三十七菩提分のいずれを配当させるかについて言及されないため「一」
とした。次に示すMAVの対応表についても同様。

㉚ このことは岸 [2013: 51, 3-4] において指摘されている。

㉛ これら初期唯識論書相互の比較検討については、篠田 [1966a, b]、堀内 [2009]、岸 [2013]
等の研究がある。

㉜ ここで見られる loc. で置かれた対象に対する yogaṃ √kr̥ の用例は BBh の他の箇所において
4 例見られる。

BBh; Skt. [W: 33, 11; 22-23]... prajñāyāṃ yogaṃ karoti ...

BBh; Skt. [W: 139, 6]... śrute yogaṃ karoti ...

BBh; Skt. [W: 276, 25-26]... samādhiṣu yogaṃ karoti ...

またこれらに類似した表現として以下のような用例もある。

BBh; Skt. [W: 236, 17-19] śamathavipaśyanāyāṃ bodhipakṣyeṣu dharmeṣu yogakriyā / tathā
pāramitāsu saṃgrahavastuṣu ca samyagyogakriyā /

④ BBh; Skt. [W: 259, 7-15] Cf. 岸 [2013: 52]

katham ca bodhisattvaḥ saptatrimṣatsu bodhipakṣyeṣu dharmeṣu yogaṃ karoti / iha bodhisattvaḥ catasro bodhisattvapratiṣamṇido niśrityopāyaparigrhītena jñānena saptatrimṣad bodhipakṣyāṃ dharmān yathābhūtaṃ prajānāti / na caitāṃ sākṣāt karoti / sa dvidvidhenāpi yānanayena tān yathābhūtaṃ prajānāti / śrāvakayānanayena ca mahāyānanayena ca / tatra śrāvakayānanayena yathābhūtaṃ prajānāti / tadyathā śrāvakabhūmau sarvaṃ yathā nir-diṣṭaṃ veditavyam /

④ BBh; Skt. [W: 259, 15-260, 1] Cf. 堀内 [2009: 131-132]

kathaṃ ca bodhisattvo mahāyānanayena saptatrimṣad bodhipakṣyāṃ dharmān yathābhūtaṃ prajānāti / iha bodhisattvaḥ kāye kāyānudarśi viharaṃ naiva kāyaṃ kāyabhāvato vikalpayati / nāpi sarveṇa sarvaṃ abhāvataḥ / taṃ ca kāyanirabhilāpyasvabhāvadharmatāṃ yathābhūtaṃ prajānāti / iyam asya pāramārthiki kāye kāyānupaśyanā smṛtyupasthānaṃ / samvṛttinayena punar bodhisattvasyāpramāṇavyavasthānanayajñānānugataṃ kāye kāyānupaśyanā smṛtyupasthānaṃ veditavyaṃ / yathā kāye kāyānupaśyanā smṛtyupasthānaṃ evam avaśiṣṭāni smṛtyupasthānāny avaśiṣṭāś ca bodhipakṣyā dharmā veditavyāḥ /

④ BBh; Skt. [W: 4,7] Cf. 高橋 [2005: 21]

sa khalu bodhisattvas tena dūrānupraviṣṭena dharmanairātmyajñānena nirabhilāpyasvabhāvataṃ sarvadharmāṇaṃ yathābhūtaṃ viditvā na kaṃcid dharmam kathaṃcit vikalpayati / nānyatra vastumātraṃ grhṇāti tathatāmātraṃ // na cāyaivaṃ bhavati vastumātraṃ vaitat tathatāmātraṃ vety arthe tu sa bodhisattvas caraty arthe parame caran sarvadharmāṃś tayā tathatayā samasamān yathābhūtaṃ prajñayā paśyati //

④ MAVBh; Skt. [Na: 55,12-19 Ta: 33,12-18 Ms: 19a5-19b1] Cf. 長尾 [1976: 310, 12-311, 8] bodhisattvānān tv

ālambanamānaskāraprāptitas tadviśiṣṭatā // IV. 12cd

śrāvakapratyekabuddhānaṃ hi svāsantānikāḥ kāyādayaḥ, ālambanam / bodhisattvānaṃ svaparāsantānikāḥ, śrāvakapratyekabuddhā anityādibhir ākāraiḥ kāyādīn manasikurvanti / bodhisattvās tv anupalambhayogena / śrāvakapratyekabuddhāḥ smṛtyupasthānādīni bhāvayanti yāvad eva kāyādīnāṃ viśaṃyogāya / bodhisattvā na viśaṃyogāya / nāviśaṃyogāya / yāvad evāpratiṣṭhitanirvāṇāya /

④ 堀内 [2009] では、この anupalambhayogena という語はMAVの他の箇所には見られないとし、『二万五千頌般若』(Pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā: PsP) に見出されるとして用例を挙げている。

PsP; Skt. [Dutt: 146, 5]

bodhisattvo mahāsattvaḥ prajñāpāramitāyāṃ śikṣate anupalambhayogena /

PsP; Skt. [Dutt: 149, 4-5]

bodhisattvo mahāsattvaḥ prajñāpāramitāyāñ caran prajñāpāramitāṃ śikṣamāṇaḥ sarvākārajñatāyāṃ niryāsyati anupalambhayogena /

④ MAVBh; Skt. [Na: 19, 22-20, 10 Ta: 3, 10-19 Ms: 2b4-6] Cf. 長尾 [1976: 225, 2-9] [d. Asallakṣaṇānupraveśopāyalakṣaṇa]

idāniṃ tasminn evābhūtaparikalpe 'sallakṣaṇānupraveśopāyalakṣaṇaṃ paridipayati /

upalabdhiṃ samāśritya nopalabdhiḥ prajāyate /

nopalabdhiṃ samāśritya nopalabdhiḥ prajāyate //I. 6

vijñaptimātropalabdhim niśrityārthānupalabdhir jāyate / arthānupalabdhim niśritya vijñaptimātrasyāpy anupalabdhir jāyate / evam asallakṣaṇaṃ grāhyagrāhakayoḥ praviśati /

④⑩ Cf. 早島 [1982: 146-176]

④⑪ MSABh; Skt. [L: 140, 14-21] Cf. 長尾 [2009: 234-235]

smṛtyupasthānavibhāge trayāḥ ślokaḥ /

caturdaśabhir ākāraiḥ smṛtyupasthānabhāvanā /

dhimatām asamatvāt sā tadanyebhyo viśisyate //XVIII. 42

katamaiś caturdaśabhiḥ

niśrayāt pratipakṣāc ca avatārāt tathaiva ca /

ālambanamanaskāraprāptiś ca viśisyate //XVIII. 43

anukūlyānuvṛttibhyāṃ pariñōtpattito 'parā /

mātrayā paramatvena bhāvanāsamudāgamāt //XVIII. 44

④⑫ 岸 [2013: 59-60] の十四行相の項目列挙における訳語を採用した。

④⑬ MSABh; Skt. [L: 141, 25-141, 1] Cf. 長尾 [2009: 236]

katham avatāraḥ / caturbhiḥ smṛtyupasthānair yathākramaṃ duḥkhasamudayanirodha-
mārgasatyāvatārāt svayaṃ pareṣāṃ cāvatāraṇāt / yathoktaṃ Madhyāntavibhāge /

④⑭ ASBhでも同様に、四念処の修習による四諦への悟入が説かれる。

ASBh; Skt. [Ta: 86, 5-19]

punar eṣāṃ yathākramaṃ catuḥsatyāvatāraḥ phalaṃ / kāyasmṛtyupasthānena duḥkha-
satyam avatarati, saṃskāraduḥkhatālakṣaṇena dauṣṭhulyena prabhāvitavāt kāyasya / tathā
hi tatpratipakṣabhūtā prasrabdhīḥ kāya eva viśeṣeṇōtpadyata iti / vedanāsmṛtyupasthānena
samudayasatyam avatarati, sukhādivedanādhiṣṭhānatvāt saṃyogādīrṣṇāyāḥ / citta-
smṛtyupasthānena nirodhasatyam avatarati, nirātmakaṃ vijñānamātraṃ na bhaviṣyatīti
paśyata ātmocchedāśāṅkāmkukhena nirvāṇōttrāsābhāvāt / dharmasmṛtyupasthānena mārga-
satyam avatarati, vipakṣadharmaprahāṇāya pratipakṣadharmabhāvanād iti / punar eṣāṃ
kāyavedanācittadharmavisamyogaḥ phalaṃ yathākramaṃ veditavyam, tadbhāvanayā
kāyādīpakṣadauṣṭhulyāpagamād iti //